

九州大学蔵[林家正蔵咄本]改め「忠臣蔵道化縁起」 翻刻と解題（下）

前田，桂子
長崎大学教育学部：准教授

<https://doi.org/10.15017/2547983>

出版情報：文献探究. 56, pp.1-13, 2018-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



九州大学蔵「林屋正蔵咄本」改め「忠臣蔵道化縁起」翻刻と解題（下）

前田 桂子

一、解題

本稿は前々号¹掲載の標題の続編である。

本作品が早稲田大学蔵『忠臣蔵道化縁起』²および国立国会図書館蔵『宝合勢貢の蔵入』³と同じ版木で作られた本であることは前稿で述べたが、後半部分となる本稿の翻刻においても三本間に異同が見られる。

る。

まず、「宝合勢貢の蔵入」（以下、「宝合」と称する）では、「忠臣蔵道化縁起」（以下、「忠臣」と称する）の二十一ウの後の左に広告の頁があり、表紙が付いて中巻が終わる。続いて下巻の見開きには「宝合勢貢の蔵入」という内題があり、「五雲亭貞秀画、林屋正蔵作／天保八丁酉年／孟春新刻／江戸馬喰町二丁目／書物絵艸紙錦絵／数品之間屋／永寿堂／西村屋興八販」の記述がある。また、下巻の裏見返しには同じく天保八年に新刻された十一種類の書物と、化粧品「仙女香」「美玄香」の広告が掲載される。本書「忠臣」が「宝合」の改題本であることはすでに前稿でも述べたが、改題して出版する際に、元の上中下巻を一冊にし、広告の頁を削ったものとみられる。また、二十一丁ウの「林屋正

蔵」とある箇所は、版木を削って「林至正蔵作」と刷られた上に墨で書き足してあるのは明らかである。また、一才と二十一才に「九大図書館」の蔵書印あり。いずれも巻末の画像を参照されたい。

二、凡例

- 1 翻刻は九州大学本を使用した。虫損などで解読できない部分については早稲田大学本、国会図書館蔵『宝合勢貢の蔵入』を参照した。いずれの本でも判別不能な箇所は「||」で示した。
- 2 変体仮名は原行の文字に改め、漢字は異体字を含めてなるべく原本の通りとした。改行も原本通りとしたが、行に収まらない場合は二行に渡って配置した箇所もある。
- 3 原本で文字を で囲んだ箇所は翻刻の際にも同様にした。
- 4 丁数の記載はないが、便宜上、全ページに丁数と裏表を付し、（一ウ）（二オ）と記した。

5 踊り字について、一字点は「ゝ」「ゞ」で示し、二字以上の点は「く」「ぐ」を用いた。

6 本文中にある絵図の位置におおよその内容を注記し「」で括つた。巻末の画像は本稿に翻刻を掲載した本書の後半部分の一部である。

三、翻刻

金魚不快の御玉

正面に敬ひ奉つるは塩谷家の

重宝金魚不快の玉と申

奉つるわんぱく天王たくり三年

八日は薬師の御縁日にて

もとめ給ふ御玉なり此ごろは

せわしきまゝろくくにはぼうりも

あたへねば不快の玉と申奉る

おのく前へよつてらんちう

あげられませう

「金魚ばかりで鮎いだく」

〔水盤に

岩山と芦を配した図〕

〔猫足の台座に

金魚が描かれた玉の図〕

〔十六才〕

こなたに敬ひ奉つるは
加古川本蔵行国

わが簪の大星力弥へ

引手物としておくられたる

所の高のむさしの絵図なり

此とき力弥年十六才なりし

ゆへ世に十六むさしといひはやす

四十七人の浪人無商売にて

居食にし時至て主敵の屋敷へ

乱入してついに敵をせつちんへ

おいこみ名を後代にあげしも

この絵図の御徳なり

〔十六ウ〕

是に安置し奉つるは太田了竹といふ藪の中より

出現ありしおその貞節子ゆゑの

やみだ如来と申奉る御くしには黒き御高祖頭巾を

いたゞかせ給ひ

左りの

御手

には

さり状

〔頭巾姿で書状を持った如来像の図〕

「御光は油つぽから引出したる

びんつけのつや頭巾をこゑて

光る事図のごとし

右の御手

には灯ちんをもたせ給ひ伊五よくと只二聲にていかなるねぼうも
おきあがる事きめう也たとへちゝのなき小児にてもよく子育て
ひさうぼさつと一躰分身の御作なり路考よつて

はいあらませうはまいだくく (十七才)

大般若面經一卷

是なるはんにやア面經はむかし御山の開山

天王寺屋芥子上人より世々傳はりて路考

上人五世の什宝當代は二代目芝翫

和尚の所持にして當山娘道成寺の

宝物なりひとたびはいするともがらは

ふつとりんきのつのををり

金にうらみの欲をのがればんのふ

ぼだいの道に入るちかう

よつてきやうげんを

むすばれませう (十七ウ)

是なる石塔婆は平家の侍大将弥平兵衛宗清主敵源の義経公を
怨みんと仮に須磨の浦の土民石屋の亭主弥陀六と変名して土の
七輪の塔にて煮立し物を椀の中へすぐに熱盛卿の追福のために

建し塔婆なりしんぐの御方はちかうよつて

灰があらば

横の口から

ませう

地水火風空もの鍋で煮炊する

五輪にならぬ七りんの塔

はやしや

正藏法師

(十八才)

藝者衆之内歌の式紙

三味線の天智天皇

花林堂建立の御とき

唐桑童子に命ぜられ

長箱太政大臣のおゝせ

にて紫檀棹の

赤染右衛門が読し

御座敷杓人衆の

内の哥也縁起は左り

呑のだりむく上人披講

あられますしとやかに

聴聞あらませう

〔色紙の図〕

「やすらはで

ねなまし物を

さよふけて

かたふくまての

月をみしかな」

(十八ウ)

一、やすらはでねなましものを
さよふけてかたぶくまでの月を
見しかなどの御心は座しきの迎ひ

〔芸者の図〕

引もきらずやすらはで
毎晩く夜明しの長
座しきかたぶくまでの
月を見るところの御心寝な

まじものとはたゞ寐ころぶ

事を禁め給ひサンヤリウデの

拳を堅にせよとの御哥也座敷の

長うた一仲にてもうたはせ聞こふ酔て

壺ばいあがられませう

〔十九才〕

是に安置し奉るは頃は人皇十一代垂仁帝はすいなきみ取くませたり
手を

しめさせゑいらんありし四十八手の尊像にておもかげはあさまがたけ
にたゝせ給ひもろ

くゝの悪魔をはらッてそつこでせいとくらましゝにしめし給ひ波こゝ
もとや

〔隅田川狂女の掛軸の図〕

浦人松風の物狂ひまた隅田川の狂女をしづめ本性になし給ひ恋しと

おもふ我妻にふたゝび近江八景の思ひ大津の芝居はんぜう睦月と
恋の手をとりかわしたる春駒のいさみくゝて老松の祝義までかたらせ
ん

〔十九ウ〕

との御せいぐわんちかふよつて聴聞のとげられませう

豊後
の國
富本山豊前寺の本尊

〔本尊と講釈する男、聴衆の図〕

〔二十才〕

今より四十九年の

▲上より

清太夫といふ人身の丈七尺六寸重さ

昔天明八戊申年

四十八貫目寛政元己酉年大関となる

目黒碑文谷の

前代未聞の男なり仍て彼是を

仁王尊大に利益

取合せて高覧

ありて参詣の人群集せり

に備ふ

また其年に雲州より出し

関取に九紋龍

▲下へつゞく

〔相撲の図〕

〔二十ウ〕

碑文谷仁王尊文盡畧縁起

抑佛法守護の仁王尊といつば辱くも大佛銭の一文にして二文と
別れ仁王と現じ三文の鉄網に住で四文谷の五文番とならせ給ふ

故に六文の光岸寺を灯し七文の御備を供じ八文をかたどり

(二十一才)

やうか えんにち くもんりう せど
八日を縁日として九紋龍が如く裸

にてつつ立十文の御足袋十一文の鞋

にても御足にちいさきとの御戯云

仍て十二文の御足を御捻となし

賽銭に上て拝あられ

〔わらじの図〕

ませう

林屋正蔵作 (花押)

五雲亭貞秀画 (花押)

(二十一ウ)

箒勘責の鎧

是なる御鎧は凡そ

年数拾貳万三千

四百五十六石七斗八升

九合五夕年のそのむかし

開平年中源の

義経公の家臣

亀井の箒郎の

着用なりしが

〔鎧の図〕

(二十二才)

其後開立年ぢう二一天作の五斗兵衛が相傳して八箒の

戦ひに見一無頭作九に責かゝり大敵の中を二つに割三ツに

割九ツにまでわつて通りまた引かへして掛たてゝ早割の手練に

多くの敵は引たりけり五斗兵衛は九沉と九度沉みしが

一進と又すゝみ我一子帰一倍七郎へ此よろひを相傳して

九々八十一歳のとき目出たく往生とげられたる

箒勘責馬鹿Ⅱと名付たる鎧なり

七ツの内を二ツ引うよつて五倍あられませう

(二十二ウ)

成田屋武道妙王

〔不動明王の座像〕

市川の家は万治三庚子年より

相續して今天保七丙申年まで

凡百七十七年に成

是に安置し奉るは

忝なくも成田山不動明王と一鉢分身

にして成田屋武道妙王と申奉まつる則御頸には鬘を

頂き右の御手には市川代々の太刀をもたせ給ひ左りの御手

(二十三才)

には鎌輪ぬをひつつかみ其昔万治三庚子の年元祖
市川才牛上人鯉の昇る龍門の瀧へ籠り眠るともなく
其時に夢中に不動の着言を蝙蝠瓢箪の口元細くとも
末廣がりの子孫をさづけ福牡丹花の富貴にして世の
世話ごとかまわ注6
世話事ハ〓〓ぬゆへ伊勢海老のごとく髭永く腰かゞまる
まで長命長寿子孫連綿と相続なしたまふ鼻の
(二十三ウ)

ひくき者は高くなし眼のしよぼくしたるも一ツにらめば
おほ
大きくなし口のまわらぬも小田原外郎の奇特にて銭
ごまがはだしで欠出すほど廻り出し柔弱なる人も
一ツにらめば暫くのうちに荒事をつわ物となり助六
がごとく頭をしめたる頭痛やみも楽屋にて

はち巻をとらせんと御誓願御ひあきの
御方は當時八代の〓団十郎どんぐりと

御拝あられませう
(二十四オ)

〔団十郎の姿絵〕
(二十四ウ)

「ア、そんなら此手合は上使ときいて酒の事だとおもふのかこれも
もつとも
いづれを見ても鬼ちくの相かゝるけんその組傳ひ雲も行なり大江山

鬼の居抜へ新長屋童子は定り四ツ切と岩屋の門へかけあんど
そこへ上使はきのきかぬたいこうたいでひやかしの肩で風きるそゝ
り
かた廻り南枝の梅が香や花の兒見せ東風が堺町からふき屋町
五年ぶりで戻りばしいはずと江戸ツ子三田産紋にあらはす渡
辺のア、綱もねへ小二才がごろつきであひにわたりきた童子長
屋の店がしらモシ鬼兵衛さんお心やすうおたのん申やす

作者曰

此文句は廿二年むかしのせりふにて定めて古好の
御方は御ぞんじならんが再こゝに写す
(二十五オ)

是に飭置処の御数珠は粳山の開基田楽上人
荒行を修し給ひし時のだんごじゆの御数珠也ひゑの
団子の御山の汁宝なりしが其後五ツさして五文ぜきの
宝と也春秋二度の彼岸団子にもちひられうら
ぼんには御むかひおくり団子と尊まれて其名高く
神勅によつて賀茂川のみたらし団子となり越後の
ふけすぎ兼勝団子へ夢中にさづかりしせんと此
地へとび団子となり此じゆずの徳をもつて大敵
をうつこのやの十団子もろこし団子までもせめ渡り

〔数珠の図〕

おつつまくつつせめたゝかひあるひはくしざしせいろう

ぜめ木きばちのうちにてひんまるめ竹たけのかわばたへおひ

つめしに敵てきはうんの月見団子つきみだんごかなはぬゆるせといふ所ところへ

日本にっぽん一いちのもゝ太郎さるきじ犬いぬの三けつをしたがへおめき (二十五ウ)

さけんでせめたてゝたちまちてきをうち ▲上より あまいたく

とりて我わが日本ひのもとへかへりしも我わがきみ と称名もつとも

団子だんごの御いせいと 四文の団子一本

あり とは

がたくも又またとうとけれ其

のち兼勝団子かねかつだんごのおく方がた 〔桃太郎鬼退治の図〕

あやめ団子だんごの前まへ ちと

念珠 ちと

となりしが ばれ

ゆゑ ま

あつて せう

御そぼつかひのおかめ団子だんごに下されしをいゝぐら片町かたまちの菩提ぼだい

所しよへ納められし処ところの数珠じゆずなり御しんぐの御方おんかたは ▲下へ (二十六オ)

是これなる品しなは忝かたじけなくも千年せんねんのそのむかし

鎌倉かまくらの大将たいせう大領だいれう久吉公ひさよしこうの紋所もんじよ五三ごさんの桐きりにて

せいしたる所ところの下駄げたなりひやうたん四ツ目のこく

印いんは極ごくみみつゆへ是これをいはず其後そのち花川戸はながわどの

助六すけろくへくだされし柩たまきの下駄げたはすなはち是これ也

此下駄このげたをはき大門おもんをはいるとき手の平てひらへ

助六すけろくと三さんへんかきて是これをなめれば一生いつせう

女郎じやうらうにふられるといふことなく金龍きんりう

山の客殿きやくでんより目黒めぐろの面像めんざうまで御ぞん

じの御利生ごりせう尊とうとく遠くは八王子はちわうじの

炭ゆきばいたんなはつかけちゝいちかくは

三谷さんやの古ふるやりて梅うめぼしばゝアにいたる

までしんぐの徳とくによりてはけ先さきの

間あいだより安房上総あはかつさを一ひとトめま (二十六ウ)

見るほどの眼力がんりきつよくなさんの

御せいくわんなり

久吉公ひさよしこうより

くだされし (一助六の姿絵)

下駄げたなれば

花道はなみちの間の

ふりことに河東かとうをかたり

又またじやの目めの傘かさをさす

べしとの御たくせん御ひみきの
御方かたは市川八代木場いちかわはちだいきばへよつて

見物けんぶつのあられませう

(二十七才)

是これなる車くるまの輪立わたちは

そのむかし北郭ほくくわくにて

大よせ小よせの曲くる

輪わの名なとりは千山花せんざんはな

妻花つまはなまど誰たがそで

みよしの初菊はつぎく小むらさき

其外美人そのほかびじんの枕まくらをあつめ

客きやくは夜毎よごとにくるくゝと

廻まはし枕まくらの情なさけなや又またうら名染なじみ

ひよくの箸箱車はしばいぐわのしぐとなされたり

まくらを下したより返かへしてよめば則すなはち是これくらま

と成なるらの字じの仮字かなはるの字じにかよふ

車くるまも枕まくらものがれぬ中なかちかう

(二十七ウ)

よつては油あぶらがつきます

遠とをくにて拝はいあられ

ませう

〔車輪の図〕

○是これに掛奉かけたまつる一軸いちじくは

先の式亭三馬せんしきていさんばが戯作けさくしたる

小野をののばかむらの御うたよみ哥あそなり

ある時ときばかむら芝居事しばあひごとして遊び

居あたりしがだゞの大臣たいじんおさきのわんぱく樽拾公たるひろこう

源公げんこうも平公へいこうもおのゝ天神講てんじんかうの列座れつざにて子ねの字じ

八ツをのを書いてこれをはやくよんだものは能子いんこだとありければ

小野をののばかむらその年としわづか八才さいにて見みしらせ給うたふその哥うたに

つぎへ

(二十八才)

「子ね子こ子ね子こは潮来いたこを

はやす

ことばにて

子ね子こじや子ね子こじやはちと

ふるいうた

誠まことにきめうな

趣向しゆかうよつて拝はいあられ

ませう

(二十八ウ)

羽生村与右衛門所持の火打鎌

〔畳んだ衣裳と三宝の図〕

不破名古屋の衣装

(二十九才)

是に鋸り置処の火打

鎌は下総の国岡田

郡羽生村宝蔵寺の

什宝にして同所

の百姓与右衛門所持の

鎌なりそのむかし承應

二年の事なりしが

与右衛門が女房

累と愠気

けんくわより事

おこり亭主は

摺子木女房

は摺

鉢と

いふは▲

▲あまり古風ゆへ亭主の与右衛門火打がま女房は石を打

つけ又打かゝるを石にて請とめかつちくとたゝかひしが

祐天和尚中に入分まづしばらくと両

人へ仏法の尊とき事をときしめし

衆生済度の

其為に

▼ 多くの石に

文字を書六字の念仏の

六の字や又十念の十の

字や九品浄土の九の字もあり書ては同所の絹川へ

なぜこみくし給ふを今の世までも此文字残り所のものが

拾ひとり火打石とて賣買なすも祐天和尚の道徳なり

夫婦喧花に石と鎌と

かつちくと打合ふ時ひかりくと

火の光り電光のごとくはつし

たる稲妻のもやうは不破の

伴左衛門また山三郎が名字の

名古屋は火打鎌の焼印

よりおこりしもこれぞ

輪回の車の輪

累与右衛門再生して

不破と名古屋の早

替りされば市川

五代目向嶋白猿和尚の

(編笠を脱ぐ侍の図)

(鎌をふりかざす男の図)

(三十才)

(刀を構える男の図)

(三十ウ)

狂哥きやうかにも

「三階さんがいはくるしといふも

ことほりや

生死流せうじるとん転てんの

早替はやがはりして

とおよみ

なされた

ちかう

よつて

正本せうほんの

よまれ

ませう

御顔ごがんの薬 仙女香

坂本氏製 (三十一才)

林家正蔵作 五雲亭貞秀画

〔寄席の出口から客が帰る図〕

美玄香

注

- 1 文献探究 第54号 平成二八年三月発行
- 2 九州大学附属図書館 九大コレクション 〔林屋正蔵咄本〕
(http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/handle/2324/1398185/kokubun24L43_154.pdf)
- 3 早稲田大学図書館古典籍総合データベース 忠臣蔵道化縁記／林至止蔵作・五雲亭貞秀画
(http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he13/he13_02420/index.html)
- 4 『宝合勢たからあわせみせの蔵入』国立国会図書館蔵の改題本
- 5 「豊後の國」に「ぶんご」「くに」のルビあり
- 6 「＝」は、それぞれ鎌の絵と「o」

(まえだ けいこ・長崎大学教育学部准教授)

九大本と異同のある「宝合勢貞之蔵入」(国会本)の画像 (後半部分)

中巻裏見返。「忠臣」二十一ウ参照



末尾、裏見返し



「九州大学蔵 忠臣蔵道化縁起」の画像

十五ウ、十六オ



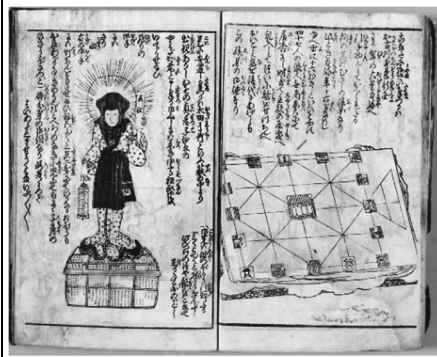
十七ウ、十八オ



下巻見開き



十六ウ、十七オ



十八ウ、十九オ



「九州大学蔵 忠臣蔵道化縁起」の画像

十九ウ、二十オ



二十ウ、二十一オ



二十一ウ、二十二オ



二十二ウ、二十三オ



二十三ウ、二十四オ



二十四ウ、二十五オ



二十五ウ、二十六オ



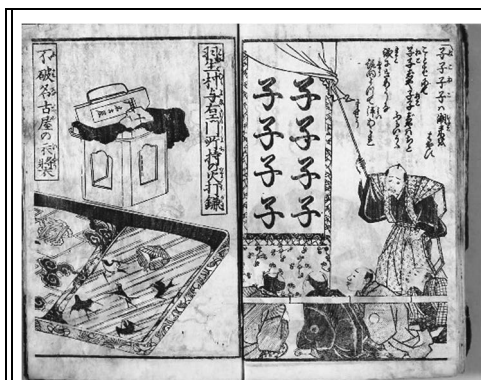
二十六ウ、二十七オ



二十七ウ、二十八オ



二十八ウ、二十九オ



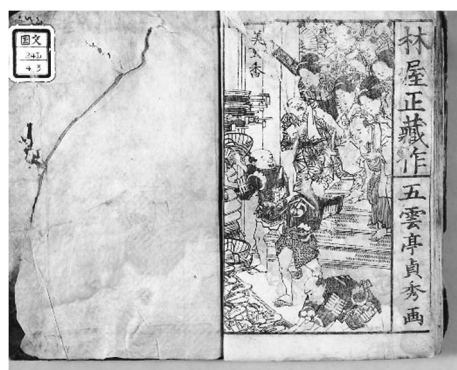
二十九ウ、三十オ



三十ウ、三十一オ



三十一ウ、三十二オ



裏表紙

